

(幕別町) 町民と考えるオリンピックの町ワークショップ (第2回) 議事メモ

コーディネーター	伊藤 伸
説明担当者 (自治体)	石野郁也、甲谷英司、日下部孝彦
日時	2019年1月8日 (火) 18時30分から21時05分まで
場所	幕別町札内コミュニティプラザ (幕別町札内青葉町311-11)
その他	参加者数 (町民) 6名、(短大) 2名、(オブザーバー) 4名 欠席者数 (町民) 5名、(オブザーバー) 1名 傍聴者数 (町民) 13名、(町外) 8名、(報道) 2名

趣旨・概要

第2回目は、第1回のワークショップで出された意見を踏まえて、「子どものスポーツを支えるにはどうしたらよいか」について重点的に議論を行い、各参加者から改善提案シートへの記入を行った。

第1回の振り返りと今日の進め方

コーディネーター

前回は、初めにこのワークショップの特徴や目的について、説明を行った。このワークショップでは、無作為で選ばれた方の中から、11人の参加申込みがあり、そのなかで、オリンピックのまちづくりについて、一緒に議論していくものであると説明した。

後半には、自己紹介を含めて、「町出身のオリンピックが多いこと」について参加者から意見を出してもらった。私が外で聞いていたイメージよりも、町民はあまり特別視をしていないという印象を持った。また、スポーツも大切であるが、子どもの学力も一緒に考えて、文武両道を進めていくべきではという意見もあった。

ワークショップの終了後のアンケートで、皆さんの参加動機を聞いたが、「スポーツには全く興味は無いが、行政に少しでも関わりを持ちたい」という意見や、「スポーツ熱が幕別にはあるが、今後どのように生かしていくのかを知りたい」といった意見があった。

もし、公募でワークショップを進めたのであれば、ほぼ全員がスポーツに関心がある方々だけで議論するということになるので、参加されている方々はある意味で町民の縮図という形で参加していると思う。このワークショップを通じて、別に自分がスポーツをするだけではなく、幕別町にはこのような特徴があるからスポーツにうまく引っかけて何か自分で活動してみようというだけでも大きな違いになるのかなと思う。

また、「オリンピックのまちづくり」について賛成であるかと聞くと、皆さんは賛成という意見であった。

その理由として、次の意見があった。

- ・町民がスポーツと触れ合うことは大切。
- ・オリンピックを軸に生涯スポーツをまちづくりやまちおこしに生かせるのでは。

・このタイミング・機会を逃がさず幕別町の方で生かしてほしい。

ワークショップの中でも参加者から意見があったように、現役オリンピック選手が5人いることをうまく使うことで幕別町の魅力をもっと発信できるのではないかという話があった。今後、オリンピック選手がたくさんいるということと、幕別町のまちづくりをどのようにしたら結びつけることができるのかを主眼に置きながら議論を進めていきたいと思う。

最後の質問で、「今後のワークショップに対して何か要望はあるか」には、次のような意見があった。

- ・スポーツ環境に対しての情報不足。
- ・スポーツを「する」だけでなく、「見る」「楽しむ」「支える」など日常的に関われるにはどうしたらよいか考えてみては。
- ・オリンピック選手を一人でも良いので、ワークショップに参加してほしい。

今日の進め方は、これから議論していく中で感じたことを「改善提案シート」に記入していただき、その中で個人・地域・行政で行うことを記入していただきたい。また、前回のワークショップで、「子どもがどのようにスポーツや運動に関わり、親しみを持てるか」、「生涯スポーツといわれるように大人も含めてどうやってスポーツに関われるか」の2つの意見があった。そのうち、今日は、「子どもがどのようにスポーツや運動に関わり、親しみを持てるか」という観点で議論を進めていきたい。

配付資料説明

教育委員会

前回のワークショップで話題になった幕別町の学力状況がわかる資料として、学力調査結果を今回配布した。幕別町の小学6年生は、全国平均から比べて、項目によって弱い面や強い面の多少の凸凹はあるが、全道平均から比べると平均以上の学力であった。また、中学3年生は、全国平均、全道平均から比べると平均以上の学力であった。

合わせて、全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果も資料に添付した。運動が好きという項目は、中学2年男女で全国平均と比べて高いが、全道平均と比べて、小学5年男女と中学2年男女どちらも低い。オリンピック・パラリンピックの内容や歴史を知りたいという問いには、小学5年男女で全国平均、全道平均から比べて高いが、中学2年男女では平均並み、むしろやや低い。

そのほかに、スポーツ施設の利用状況や主となる屋内運動施設である「幕別町農業者トレーニングセンター」と「札内スポーツセンター」のパンフレットを配布した。

ワークショップ（協議）

コ) 事務局から説明があった学力調査結果として、学力も全道平均より高いという結果があるので、ある意味文武両道が成立している。また、特徴があったのは、全国体

力・運動能力、運動習慣等調査結果で「オリンピック・パラリンピックの内容や歴史を知りたい」という問いには、小学5年男女で平均より高いが、中学2年男女では平均並みであること。小学生から中学生にかけて平均並みに落ちている。全国でも同じ調査をしているが、このような変化は、あまりない。この原因は何でしょうか。

オ①) 中高生は新聞や授業の中でも出てくるので、すでに知っているから、興味を持つというより今更言われても知りたいと思わないのでは。

オ②) 自分の現状をわかってくると将来オリンピック選手になりたいという夢よりも勉学に励みたいという結果なのかなと思う。

メ①) 小学校のときは何でも知りたがるが、中学生になると興味がなくなり、どうでもよくなってしまふ。自分のことで精一杯になる。好奇心が低下していくということですかね。

メ②) 逆に小学生の先生が興味を持たせるようなことをしてきたことが全国より高い結果になったのでは。

コ) オリンピックや高木姉妹などについて、学校のカリキュラムで組んでいるのか。

事) 平成28年度から行っている「未来のオリンピック選手を育てる事業」の中で、オリンピックと触れ合う事業を展開しているが、その以前はあまりそのような機会はなかったかもしれない。

短①) 私も先ほどの意見と同じで、小学校のときは何でも知りたがるが、中学生になると自分以外のことには興味がなくなる傾向があるので、スポーツだけでなく、他の分野でも全般的に言えるのでは。

メ③) テレビとかで「幕別町出身のオリンピック選手」と取り上げているのを見て、興味を持ったと思う。でも、自分がスポーツをやっている、オリンピック選手を目指してスポーツをしているかといえば、現実的には少ない。オリンピックは、雲の上の存在であり、興味が持たなくなってしまうかもしれない。オリンピック選手は、それなりの努力や環境に育ってきた結果なのかなと思う。

コ) 前回の会議でもあったとおり、スポーツをしている人全員がオリンピック選手を目指しているわけではないということだと思う。

これから、「子どもの運動やスポーツをどのように支えていくか」をテーマに話を進めていきたい。運動やスポーツを「する」だけでなく、「見る」、「応援する」を含めてとなるが、まずは「する」といった視点から話を進めていきたい。前回の会議の中で、子どもの少年団の送迎が保護者にとって負担が大きいと出ていた。子どもが試合になると保護者も付いて行っているか。

オ①) 保護者が仕事で抜けられない場合以外は、一緒に付いて行っていた。

メ④) どうしても仕事で中抜けすることもあるが、ほぼ一緒に付いて行っていた。事故トラブルを避けるため、自分の子は自分が守るので、乗り合わせはしていない。その

ため、自分の仕事を制限してまで送迎をしているが、どうしても送迎できないときは参加をあきらめることもある。

- メ⑤) 私が子どもの頃は、保護者の送迎はなく、自分で勝手に行っていた。
- コ) 送迎は、最近になって、安全面の問題により、学校側で制限しているのか、それとも保護者側で制限しているのか。
- 事) 現在、個々の少年団の後援会に判断を任せているのが実態。
- オ③) スケートをしている親御さんから聞く話では、必ず親と一緒にいて、なおかつ健康管理等も含めて見ている。素晴らしい教員や指導者がいる環境と送迎や体調管理等をしてくれる親の環境があれば、子どものタイミングによって、競技力が伸びていると思う。
- オ④) 遠征がある際に保護者から一緒に付いて行けないから、子どもも参加できないという問い合わせに対し、指導者としては、子どもたちは団体行動で動いているので、別に保護者は一緒に付いて行かなくても十分であると答えている。でも、保護者は「子どもを見たい、応援したい」ので、付いて行きたいと言う方が多い。保護者の協力があつて、少年団の活動が円滑に動くので、その点が難しいが、本クラブとしては、団体行動で動き、保護者で1～2人が代表で付いて来てもらっている状況である。クラブ活動は、学校とは違うルールやマナーがあり、それを団体と一緒に活動するものだと考える。親がむやみに手を出すと子どもは甘えてしまうので、その距離感をつかむのが難しい。私の車は、9人しか乗れないので、それ以上の参加者があれば、2回に分けて送迎するか、乗れる人数に限定して参加するようにしている。宿泊については、子どもが泊まっている宿泊所に保護者は一緒に泊めさせないようにしている。そのため、任せるところは任せてほしいというのが私の考えである。保護者が付いて行けないから、子どもが参加しないというのが残念である。大会成績に関わらず、そのような経験を積ませるのが子どもたちにとって非常に大切である。
- コ) 子どもがスポーツに関わるために、送迎についてあらゆる意見が出てきた。保護者が付いて行けないから参加できないという意見、週末の仕事を削って保護者が付いて行くという意見、どうしても保護者が付いて行けないから相乗りするかという意見があつたが、皆さんどう思うか。
- 短①) 私が高校生の頃は、相乗りが当たり前だったので、自分自身では違和感がなかった。でも、保護者から見ると子どもを預かるという責任感が出てくるので、それが負担になってしまうのではと思う。
- 短②) 私が小中学生の頃、中体連などの公式の大会の時にはスクールバスが出ていた。私が入っていた少年団は、人数が多いので、市町村で持っているバスが相乗りで参加していたこともあつた。
- メ⑥) 保護者が負担せざるをえないのでは。

メ②) 子どもがスポーツをやりたいと思っても、家庭の状況でスポーツができる環境かできない環境かというところでその二極化の差が出てしまうので、その差を解消すべきだと思う。中体連の際にスクールバスを出すというのは、公平性があって、ありがたいことである。また、町内の総合型スポーツクラブにはバスがあるため、親が送迎しなくても、子どもが参加しやすい条件が整っているが、お金が多少かかる。総合型スポーツクラブが子どものスポーツを支えるために多少親が送迎できなくても、お金で解決するという部分。そして、その中で行政が交通費等のサポートをするという事例がある。

コ) 私が住んでいる地域では、乗り合いは禁止となっている。そして、原則、週末の練習に親と一緒にいないとダメとなっている。最初、少年団に申込みをする際に、月に何回親と一緒に行くことができるのかと書かされるので、それによって判断される。

行政のサポートとして、スクールバスを出すとかといった解決策もあれば、若いメンバーからは乗り合いに違和感を生じないという意見もあるが。

メ①) 私は練習がある場合、親の送迎か相乗りはあった。部員の中にはずっと相乗りという方もいた。部活動の後援会で、毎年、相乗りをする場合の申し合わせを行っており、相乗りする場合の同意書を提出するようにしていた。提出しない方は、相乗りをしないと決めていた。

コ) メンバーの話にもあったスポーツをやりたい環境をつくるのが目標とするのか、逆に遍くことを考えなくてもよいのではということもあるが。

メ②) スポーツをどのように捉えるかによるが、運動という言葉でとれば必然であると思う。何でも車で移動するから、子どもの体力は落ちている。どんどん体力が落ちてくると、いろんなことができなくなる。60~80歳の方は、小さい頃にもっと体を動かす環境にあったから、健康で長生きしていると思うが、私たちの下の年代は長生きできるか心配である。運動は絶対しなければならないものだと思うし、そのためには体力をつけなければならない。学力と体力と比べると、体力が大事であると思う。体力だけは自分で身に付けなければ、生き残っていけないと思う。

メ⑤) 何で保護者の送迎が出てきたのかちょっと振り返ってみると、学校の週休2日制になってからかなと思う。それは、時間やお金など、いろんな余裕ができてきたからだと思う。昔は土曜日仕事や学校があつて、遠征とかあまりなかった。今、週休2日制になっているが、指導者となっている学校の先生は土日休みなく、スポーツの指導に当たっていることが多い。週休2日制が始まった頃は、塾に通う人が増えるという見込みがあつたが、実際にはそうでもなかった。時間の使い方が勉強ではなく、運動に当てているのが実態ではないか。

メ③) 私が学生の頃、土曜日学校であつたので、スクールバスで大会に行き、親が送迎や大会を見ることはなかった。私が親になって周りを見てみると、何で親が見に来

ているのかと思った。私は土日、仕事が入る時もあるため、子どもの送迎ができないので、子どもにスポーツをやらせられないという思いがあるが、今後、子どもが中学生や高校で部活動に入るとどうしようかなと思う。体力は、少年団に入らなくても、学校の授業だけでどうにかできないか、また、学校の授業でしやすい環境を作っていければ理想かなと思う。もし、そのような環境を作れないのであれば、バスとかの送迎をお願いしたい。

オ②) 子どもが何のスポーツをしたいかということは、親がそのスポーツを理解や興味を持っているかということにあると思う。送迎に関しては、端的に言うとお金の問題かなと思う。子どものスポーツを支えるという観点で言うと、体力をつけるためのスポーツなのか、トップレベルを目指すスポーツなのかどちらかに絞って話をしないとなかなか前に進まないのではないかな。

コ) その点は、前回の会議でトップレベルを目指すスポーツのまちづくりではなく、スポーツ人口の裾野を延ばすまちづくりという観点で話をまとめていたと思う。

オ③) スポーツは体力づくり、チームワークである。親が子どもの目線に下げて考えてあげれば、対応できるものがあるのではと思う。子どもがこのようにしてほしいと言えば、親は対応し、その親の対応に子どもが頑張れると思う。最初は、スポーツの興味を持たすために家庭でやれる範囲で体力をつけて、少年団活動に入るという流れになるのでは。

コ) 裾野を広げる観点において、スポーツをしている人の18歳未満の割合は、全国平均と比べると幕別町はそれほど変わらない。先ほどメンバーから話があったスポーツ＝少年団、部活ということではなくて、学校の体育の時間で体力をつけることもできるし、遊ぶということも体力をつけることもできる。そこまで捉えた上で、幕別町の子どもたちはどこまで運動やスポーツをしているのか。一つの観点では、少年団や部活動で送迎ということがネックとなっている。そこまでいかないまでも幕別町の子どもたちは体を動かすことに長けていると言える。今日のテーマに結びつくと思う。例えば、幕別町の子どもたちはよく歩くし、よく走るということがあれば、その結果が体力測定に結びつくということになるが。

オ④) 指導者側からみても、子どもの体力は落ちていると思う。トランポリンは体幹がよくて、体が強くなるということで習わせている方が多い。週1回1時間でも少しずつやっていたら、体力がついてくる。高く飛ぶためには、体の力が強くなければできないものである。継続して運動させるということは、必要である。入ってくる子どもでも手や足の力がないと感じるので、クラブとして、そのようなところを中心に練習している。札内でスポーツクラブを始めてまだ6年目であるが、低学年の子どもにも会う機会が増えた。その前は夜に活動していたので、入ってくる子どもは限定されていた。昼間に活動するようになってから、子どもに気軽に入ってスポーツをやらせて、体力をつけさせたい、そして、スポーツから得られるものを学ばせたい

という親が多い。

オ①) 私の子どもの場合、小中高とスポーツをやっていたので、送迎において同意書を提出し、保護者会で送迎のルールを話し合っていた。前回の会議でも話をしたが、高木美帆選手がバンクーバー冬季オリンピックに出場した際、父親から遠征等にかかる費用の工面が大変であったと話されていた。その点をもう少しケアができればよいと思うし、スポーツをさせてあげられる子どもも増えると思う。ちょっとした距離であれば、高校生は自転車で通うこともできるが、小中学生であればマイクロバスを借り上げて、そのバス代は行政で負担するとなると、少年団等に参加したいという保護者も増えるのかなと思う。私の場合は、近くに祖父母がいたので、協力体制がとれていたが、地元にいる方は得するが、地方で転勤してきた方は厳しいということもある。

コ) 例として、高知市に子どもファンド基金というのがある。スポーツをする子どもを支援するという目的だけではなく、過半数が子どもたちで活動している団体に対し、1団体20万円を毎年5団体に補助しているものである。その補助を受けるために、子どもたちがプレゼンするというもので、審査するのは、地元の高校生や大学生である。子どもたちでしっかり議論して決めていこうというものである。確か3、4年前に20万円を部活動の送迎費用で使いたいというプレゼンがあった。趣旨は違うけども、子どもがスポーツをしやすい環境をどう作るという中で考えると、何でもかんでも税金を使うということではなく、うまく運用するためにどうしたらよいかという1つの提案なのかなと思う。

前半をまとめると、

- ・子どもがスポーツや運動をしやすい環境をどう作っていくかということは、運動をすることは必然であるから、運動をしたい子どもを運動できる環境をつくるのが大切であるという意見。
- ・スポーツをするということでは、少年団活動となるが、子どもの送迎がネックとなっている。原則、保護者が送迎し、相乗りはなかなか安全面の問題でできていないという現状である。その解決策は、同意書を交わし、ある意味自助努力としてそれぞれでルールを決めていくという意見やスクールバスを活用すると意見があった。いずれにしても、親が週末に働いていたり、お金の工面がつかなくなったりして、スポーツができない環境を少しでも減らしていきたいという意見があった。

後半では、スポーツを見る、応援するという観点で、議論を進めていきたい。

— 休憩 —

コ) 例えば、この場にオリンピック選手が来た場合、そういう人になりたいと気持ちが強くなるのか、もしくは選手を応援したい気持ちが強いのか、どちらでしょうか。

メ①) 私はあこがれ、応援したいという気持ちが強い。

短①) 私もなりたいたいというより、あこがれという気持ちが強い。

- 短②) 私は高木美帆さんと同じスポーツをしていたので、他のスポーツの両立や考え方、モチベーションの取り方などを知りたいと思った。
- コ) 他のスポーツをしてみるというのは、総合型地域スポーツクラブの考え方と一緒にある。元々イギリスがやっていた仕組みで、小さい頃は好きなスポーツばかりをするのではなくて、いろんなスポーツをすることによって、実際に自分に合ったスポーツを見つけられるというものである。高木美帆さんも総合型地域スポーツクラブに入っていたと聞いているが、幕別町は他の町と比べて、自分に合うスポーツを選べられるなどの特徴というものはあるか。
- メ②) 高木さんが所属していた総合型地域スポーツクラブは、出来て10年ぐらいしか経過していない。ずっと根付いているものではないが、身近な存在ではないかと思う。スポーツをできる場所が町内にいっぱいあるので、サッカーをやっている傍でラグビーをやっていたり、サッカーをやったダンスもやっていたりする人もいる。スポーツをできるチャンスは与えられていたのかなと思う。競技スポーツで強い方だけを集めたクラブではなく、みんなが参加できて、楽しめるという経験が大きかったのかなと思う。一つのスポーツだけでなく、違うスポーツを身近に見る環境にはある。
- オ④) 体育館で隣に別のスポーツをしている環境をつくるのが大切である。なぜなら、限られた場所で子どもたちは自分がやっているスポーツをしているのでは、別のスポーツをやってみようという興味や気持ちを示さない。いろんなスポーツをやってみるチャンスを作れることで、自分に合ったスポーツを見つけることができるので、そのような環境を作ることがスポーツの裾野を広げることにつながり、やがて、オリンピック選手が将来育っていくのではないかと思う。
- コ) 先ほど3人のメンバーから「憧れている」、「真似をしてみたい」という意見があった。真似をしてみたいということであると、いろんなスポーツをしてみる。その代表例として、総合型スポーツクラブであり、隣でいろんなことをやっている。これは、スポーツをするという観点になる。もう一つは、憧れや応援。幕別町の場合、オリンピックのパブリックビューイングなどがあったと思うが。
- メ⑥) 何年前前のオリンピック出場における壮行会に参加したことがある。直接本人に会って話をすることはできなかったが、感動をいただいたことに感謝をしているし、大変ありがたいことであった。
- オ①) パブリックビューイングを運営した一人として感じたことは、平昌オリンピックの時は、高木菜那さん・高木美帆さんが所属していたスポーツクラブと密接に行ってきたものであったため、単純に見て応援するだけでなく、高木姉妹を深く知ることができるパブリックビューイングであった。ここが他と違って、幕別町ならではの応援だったのではと思う。普通の応援観戦は、会場の音声や臨場感をみんなで味わって応援するものであるが、幕別町の場合、高木姉妹が昔から頑張っていることを

知っている友達や親戚、恩師などが主体となったパブリックビューイングであったので、距離感が近いものであった。パブリックビューイングを観戦していた方はもちろんメダル獲得の期待をしていたが、何よりも無事に転ばず滑り終わることを願っていた方も多かった。遅い時間であったにもかかわらず、スポーツクラブに所属している子どもたちも一緒に参加していたこと、その子どもたちや同級生が応援幕を作って掲げていたこともあり、気持ちがこもったパブリックビューイングが印象的であった。また、1～2時間程度のパブリックビューイングであったが、地元企業などから飲み物や食べ物などの提供もあり、応援している人を応援する企業などが多かったのも幕別町ならではの応援であったと思う。

- コ) そのことは外から見るとものすごく大きい特徴だと思う。こんなに素晴らしい選手がいることを壮行会やパブリックビューイングで継続していけることが大切であると感じる。幕別町の子どもたちはスポーツや運動を応援したい・触れ合いたいという子どもたちがとても多いのであれば、今までやってきた応援は良い評価となるが、逆になかなかそのようになっていないのであれば、それを強化していくことが今回のオリンピックのまちづくりのテーマにつながるのかなと思うが。
- 事) 子どもたちがオリンピック選手本人に会うと、子どもたちはどよめくと思う。やはりそれは憧れだと思う。昨年、凱旋パレードの翌日にサプライズで母校の訪問を行ったが、小学校、中学校どちらもどよめいていた。
- メ③) テレビに出ている人が実際に目の前にいることが憧れる理由にあるのでは。
- コ) パブリックビューイングやサプライズ訪問などのイベントをやると憧れるという機運が高まるのであれば良いが、逆に同じことを何回もやるとあまり機運が高まらないこともあるが。
- 事) オリンピック選手が帰省した際に、学校訪問などの計画をしている。本人の予定もあるので、なかなか実行できない現状にあるが、そのような取組を継続させていきたいと考えている。
- メ④) 他の市町村に比べて、幕別町は学校訪問などのイベントが多く、ものすごく良いことだと思う。
- メ①) 学校訪問のイベントはなかったが、中学3年生の卒業式の時に、高木姉妹のビデオメッセージがあって、会場内どよめいていた。
- コ) イベントを継続していくことで、何かスポーツの盛り上がりをつくる観点で考えたときに、何か良い提案はないだろうか。
- メ⑤) なかなか難しいかもしれないが、スケートリンクに滑ってもらうのはどうだろうか。
- メ③) 地元の札内神社で高木菜那さんが昔手伝いをしたこともあり、今でもその神社では高木姉妹の写真が飾ってある。また、オリンピック出場が決まった時などに横断幕を掲げることで、いろんな方の目に触れる機会を増やすと興味を示すきっかけとなる。オリンピック選手がテレビに出るときは、事前にアナウンスがあれば、もっと

身近に感じると思う。

- メ⑥) 今の子どもたちは外で遊ぶ機会が少ない。家の中にいると、テレビを見ているかゲームをしているかということが多いと思う。そのような状況だから、スポーツの興味が湧かない理由にあると思う。外で自由に遊ばせる機会を増やし、スポーツの楽しさを伝えることも大切である。
- コ) 一概には言えないが、幕別町の18歳未満の体育館利用者数の割合は全国的にみて多いと思う。外に出る機会を増やすために、オリンピック選手をどのように活用するか。
- メ④) 幕別町では、毎月19日にノーテレビデー・ノーゲームデーがある。その日が平日である場合、日中学校にいたるため、夜に家族内の会話、勉強、読書もしくは早めに就寝することが多く、あまり体を動かす動機付けになっていないかもしれない。
- メ②) 幕別町に限らず、十勝はスポーツが盛んであるのは地元紙のスポーツ欄が大きく取り上げていることにある。私の姉が来た時に、こんなに名前や出身校などの個人情報載っていることに驚いていた。スポーツ欄がカラーで載っているので、選手が頑張っている記事を見ると、自分も頑張ろうという気持ちになる。選手のモチベーションも上がるし、周りのモチベーションも上がる。地元新聞社の影響は大きいと思う。幕別町でもSNSの情報発信を始めたと聞いたので、マスコミの力を活用していければよいと思う。
- コ) 私も地元新聞に載った時には、出身地や出身校も載っていたので、職場では驚かれた。このような記事から身内意識を高める、応援したくなる気持ちになるのかもしれない。本日の会議に新聞記者が来ているので、ぜひ意見を聞いてみたい。
- 新①) 高校を卒業したら、十勝管外に転出することが多いので、地元の小学生、中学生、高校生をメインに記事を取り上げて、皆さんに知らせるようにしている。地域の動きを伝えることが使命としてやっている。
- 新②) 他の支社に比べて、十勝はスポーツの記事に力を入れているため、読者からの反響は大きい。先ほどの話でSNSを始めたと言っていたが、例えば町内のスポーツ施設を回ってインスタグラムに載せたら、ゲーム感覚のようなスタンプラリーとなる仕組みをやってみたらどうだろうか。
- コ) パブリックビューイングでは、身内意識があって、高木姉妹を深く知ることができる雰囲気を作ることができたという話があった。真似をすることができないが、憧れる・応援したいという動機付けにつながると思う。それでは、具体的に身内意識を出すためにはどうしたらよいかということでは、地元新聞のスポーツ記事の掲載、横断幕やポスターの掲示がある。これらの取組をテレビやラジオとかに取り上げられることによって、町民が選手に対して有難いという思いを創る環境ができ、これがスポーツを見る・応援するということにつながると思う。
- メ④) 身内だけで盛り上がってしまうと慣れてきてしまうが、外部から見た人でもオリ

ピアンの町で盛り上がっていることを聞けるような状況を作ることも必要なのではないかと思う。

コ) 現在、町内出身の現役オリンピックが5人いることは事実である。しかし、5年後、10年後にも引き続きいるとは限らない。偶然かもしれないからこそ、その5人がいる事実を汎用させることは何かあるかということをお皆さんの話を聞きながら、ずっと考えていたが、なかなか思いつかないでいる。

オ②) このことは、「オリンピックの町」をどのように作りあげていくかということにあたると思う。今、5人のオリンピック選手は素晴らしい選手で、これからも活躍してほしいが、「オリンピックの町」を継続させていくということは、ある意味一過性であり、いかにオリンピックを活用するかということである。今日の資料にある幕別町ではオリンピック・パラリンピックの歴史を知りたいかという問いについて、小学生は全国平均より高い数値になっているのは、幕別町はオリンピック選手をたくさん輩出していることにある。それは、例えば今スケートをやっている小学生が地元の大大会に出たときに高木姉妹の記録に近づくと私も高木姉妹のようになれるのではないかという意識が芽生えてくるところにあると思う。このことがオリンピックの町として役立つきっかけになるのではないかと考える。

コ) そもそもオリンピックの町とは何なのかという結論になっていくと思う。オリンピックの町としてのイメージはどのように思うか。

オ②) 私の立場から見て、町民が健康増進のために運動していくところから始まっていくものと考えているが、どうも考え続けていくとトップアスリートを目指していくようにすり替わってしまう。

コ) トップアスリートを生み出して盛り上げていくというのも一つの考えでもある。前回、いかにスポーツ人口の裾野を広げることがオリンピックの町として目指すところであると事務局から話があったところである。

オ④) 色々な話を聞いていると盛り上がりを作っていくのは、みんなで協力して作っていくところにある。高木姉妹のパブリックビューイングの話を取り上げられたのは、幕別のスポーツクラブで育った選手がオリンピック選手として出場したことが一番大きい。そのようなクラブや少年団にスポットを当てるところからやっていけばよいのではと思う。

オ③) 今、町内にトランポリン選手で有力な選手が育っており、その他にも常に力をつけてきている小学生がいるから、現役の選手は次のオリンピックまではおそらく持続していくし、頑張ってくれると思う。そのようなイメージを持って、次の世代の小学生が続いていくのであれば、常に新聞などの情報発信は効果的だと思う。特にカラーだとより目立つので、今後も引き続きお願いしたい。

オ①) 自分がメディアの仕事の中にいると、意外と情報が伝わっていないことに気が付かない。なかなか時間をかけている以上に情報が伝わっていない現状があるので、ふ

ったときに情報や目に入るようなことをメディアとして作っていかなければならないのかなと思う。新聞に出ることで、モチベーションが上がるという意見は、非常に大切な意見だと思うので、それをぜひ何か形にできればと思う。

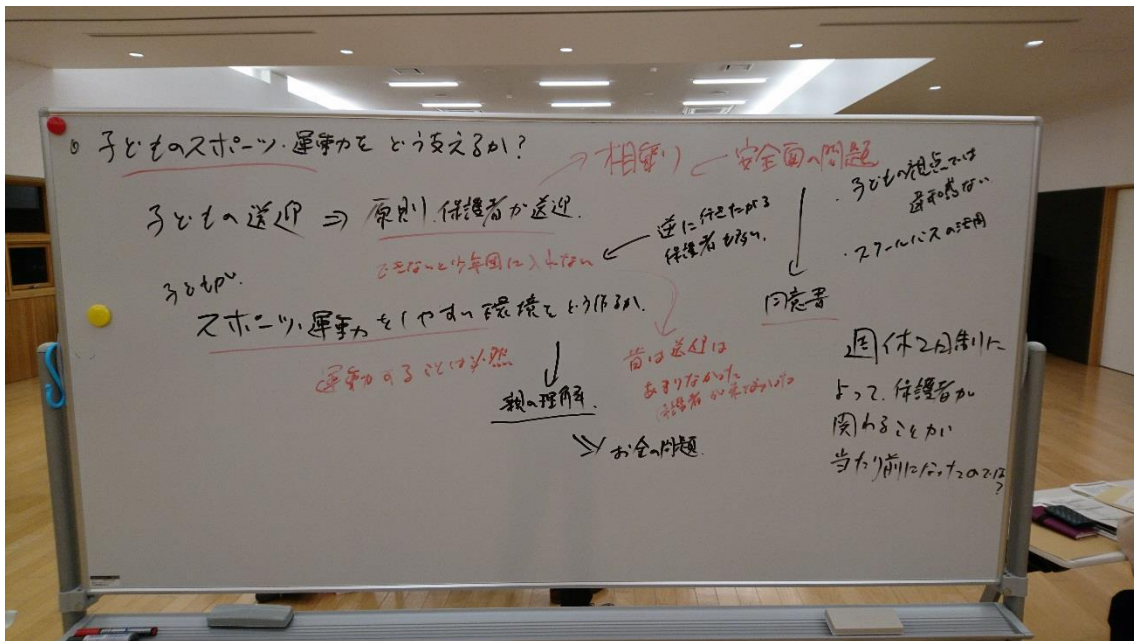
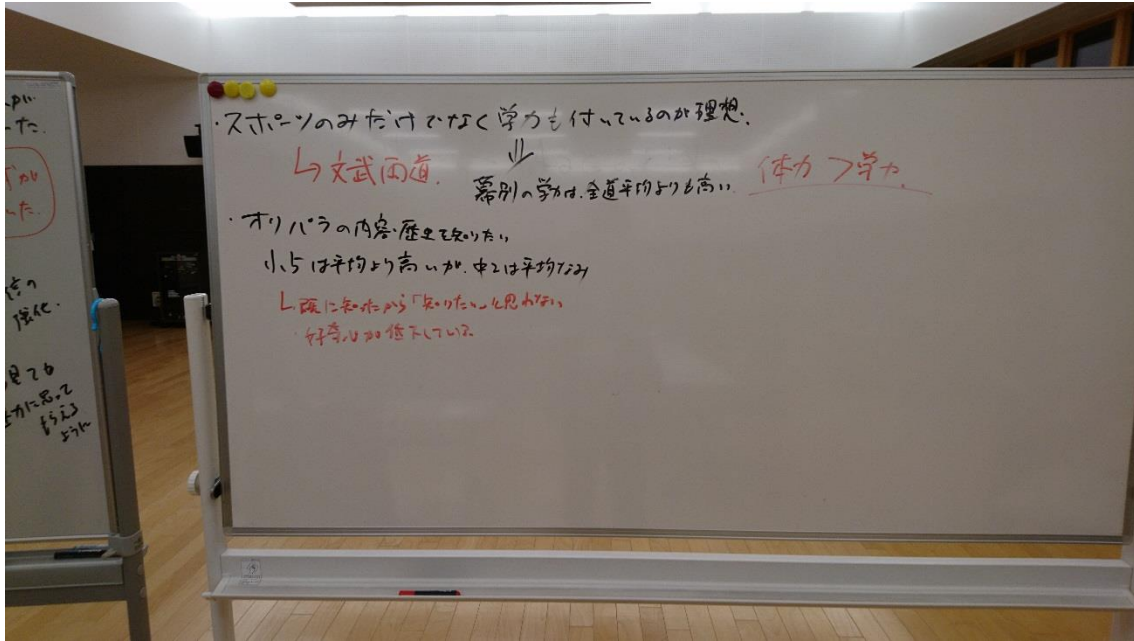
- メ②) 今、思いついたことは、幕別町で地元新聞以上のスポーツ情報を発信できるもの、例えばスポーツ通信みたいなものを行政でやっていたものを作るのも面白い。
- コ) スポーツに関して、それを特化して情報発信している自治体は例がないと思う。いろんな情報を合わせて、広報紙を発行しているのがほとんどである。幕別町でもSNSを始めたと聞いているが、SNSで気を付けなければならないことは、フォロワー数が伸び悩み、職員の手間が増えるという失敗例が出てきている。

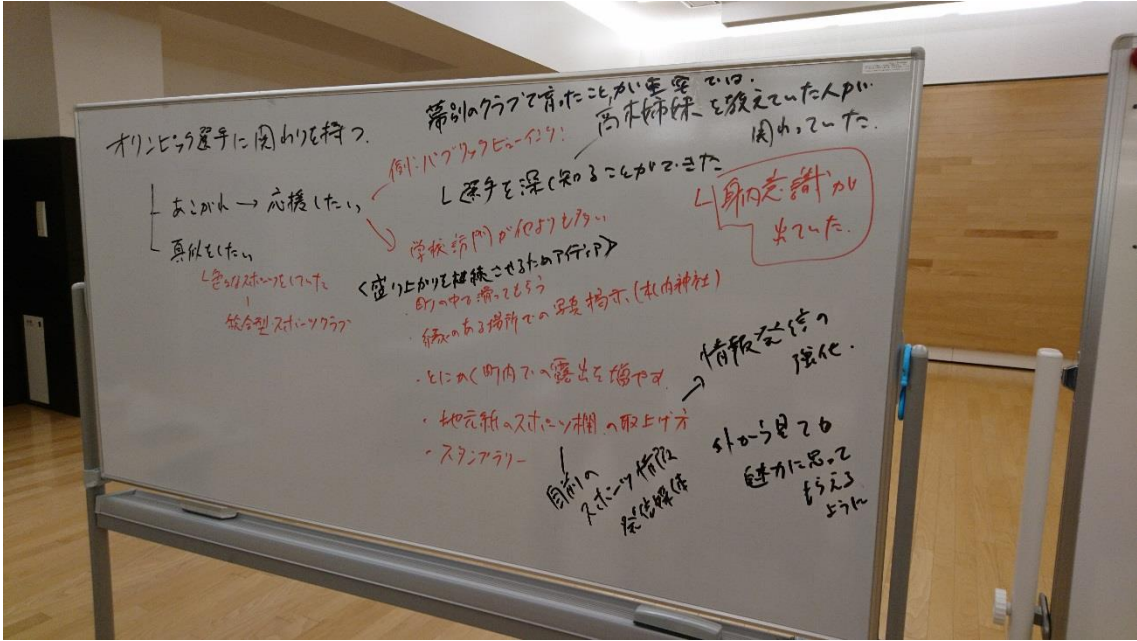
今日の振り返りと次回の目標

コーディネーター

今日を振り返ると、子どものスポーツにテーマを絞って、前半は子どもがスポーツをするにあたって、どう支えていくかという観点で、送迎や体を動かす、周りを支えるという話があった。後半には、オリンピック選手を応援するという観点で、関わりをもつことで、憧れをもつという特徴をどう生かすか。また、パブリックビューイングにあるとおり、身内意識をうまく使いながら、いかにその盛り上がりを継続させていくか。そして、その盛り上がりを継続する先には、スポーツの裾野を広げることに行きつくことになるのか、トップレベルのアスリートをどう育てることになるのかはまだまだ議論していかなければわからない部分である。でも、少なくとも継続していくことが非常に大切であることは皆さんから意見が出ていた。あわせて中からでも外からでも魅力的に見えるスポーツの観点をどのように作っていくかという議論を次回以降に出てくるテーマになるのではないかと思う。次回は、高齢者を含めた生涯スポーツや運動の観点で現状や改善策を掘り起こしていきたいと思う。

ホワイトボードの写真





オリビタ選手に因りて持つ。 節別クワで育ったことが重要。 西本姉妹を放った人Pは 因りて持つ。

あとから → 応援したい、
真似したい

↑
L色目味心でいつか
↓
試合型スポンサー

例: バクらのクワ
L選手を深(知る)にかけた

学校部門が他より強い

＜盛り上がり組織にせよ外へ行け＞
町の中を歩くとどう
縁のある場所への書き指示(社内神社)

・ヒール(町内)への露出を確保す

・地元新聞のスポンサーを取らせろ

・スポンサー

↑
周知の
スポンサー情報
発信機

新聞記者が
出ていた。

情報発信の
強化。

スポンサーの
魅力に思いつく
ように